

『Think Globally Act Locally で地域を拓く』

竜王みやび

【情報社会に生きる私たち】

日本は、人口減少と高齢化が進行し過疎地域の増加が大きな社会問題となっています。一方で、中山間地域の個性を生かして地域創生をすることで地域が再生することが期待されています。

このような近未来社会の実現には、グローバル化に対応したプログラミング技術やデータサイエンスの利用は不可欠となっており、情報の果たす役割は益々増してくると思われまます。しかし、重要なのは日本が世界に誇る先端技術とともに、日本人の心（私が注視する里山文化や、和食、伝統芸術など）の文化サービスも同様に提供していくことです。

日本の新たなカタチを創っていくためには地域の個性的な展開をどうすればいいのでしょうか。

私は、そのヒントが里山にあると考え、地域で実践し行動することが重要であると考えました。

【山・里・暮らしの文化情報】

では、日本の里山文化とは何でしょうか。上田洋平氏は、「地域文化とは、恵みの巡り合わせであり、人間は、多くの恵みに生かされ、里山の暮らしを形作ってきた。」と述べています。

また、西川一誠氏は、著書『「ふるさと」の発想』の中で、「人々は、共感と信頼によってつながり、共に行動することで新しいコミュニティを生み出す。」とし、つながりの協働社会を提案しています。

里山文化は、地域環境の中で暮す人々が長い時間をかけて創ってきた知恵の集合体であると思います。それは、自然の中で生まれてくる恵みと、それに対する感謝であり、より良く生きようとする働きかけでもあります。

私たちが、激変する社会の中で持続し継続させる地域を再構築するには、里山文化情報という処理技術を使っていくことが大切です。

【郷里・山内で発見した地域文化】

次に、私が関わる過疎化が進む「山内」での活動を通して里山文化情報について考えます。

① 聞き取りで分かった高齢者の叡知

お年寄りの脳裏には、自然の移ろいを肌で感じ暮らしに生かしてきた営みが刻まれています。私はここに着目し、地域の高齢者から昔の様子を聞きました。「一滴の水は命の水」「牛は家族」などの話を聞き今と違った暮らしがあったことに驚きました。

ここから見えてきたことは、日本の高度成長期頃までの暮らしには、「ものを大切にすること、動植物や水への感謝、人と人の支え合い、つながり」が生活の中に根づいており、高齢

者の叡知として今に伝わっていることです。「里山の知恵が地域を創る」との考えをこれからの社会に活かし、失われつつある日本の文化として継承していきたいです。

② 民意伝承を狂言やジャンボ絵本で表現

私は、地域に伝わる伝承や民話を集め、狂言や長さ約120センチの絵本などにして「地域文化の可視化」を行ってきました。そして、民話「鈴鹿の子天狗」や「水争い」を創作狂言にして上演したり、琵琶湖流域野洲川の様子や暮らしの場面を絵本などで表現・発信してきました。

さらに、山内の昔の生活風景を「ふるさと絵図」（回想法による心象絵図）に表わして、地域再生に活かそうと取り組んでいます。この絵図を完成させ、地域の高齢者が絵図の絵解きをすることで新たな活躍の場と役割を担っていただけると期待しています。今後も、地域の記憶を様々なツールを使って表現していきます。

③ 里山文化を復元してツーリズムに活かす

ここ数年、沖縄や韓国と環境文化交流を進めており、山内の自然や歴史文化、生活体験を通して山内の自然や文化の良さを知ってもらおうと『山内まると生活博物館』ツアーを行いました。

この経験を生かして、今年、県外の学生とともに食事で使われていた器（箱膳）を復元した活動では、昔の生活を再現することができ、自給自足や食べ物を粗末にしないという昔の考えを学ぶことができました。

山内地域は、自然や文化、食そして人という地域資源としての魅力が残っています。来訪者に応えられる仕掛けづくりを進めていきたいです。

【地域創生における文化情報への期待】

山内地域には「多様性・固有の文化・物の意味や役割」が共有されています。老若男女がそれぞれの生き方や尊厳を認め、支え、生かし合って生活を続けてきましたが、地域の道普請や農事の助け合いの制度は、そうした思いで伝えられてきました。

私たちが生きる時代は、ビッグデータを駆使して新たな豊かさを築こうとする社会であり、科学・技術の進展が私たちの生き方を大きく変えるものです。

しかし一方で、心の時代とも言われます。先人の知恵や気づき、助け合いの心をこれからの社会に活かすためにも里山文化を紐解き、情報化することが大事だと考えます。地域創生のカギは、身近なところにあるかもしれません。